

アイヌ民族の歴史と文化

第2回

—〈ひと〉〈暮らし〉〈ことば〉からさぐる—

「札幌市民第一号」琴似又市氏のこと

～幕末維新期の札幌とアイヌ社会～



谷本 晃久 (たにもと あきひさ)

北海道大学文学研究院教授

1970年、札幌生まれ。学習院大学大学院を中退し、同大助手、北海道教育大学岩見沢校助教授等を経て現職。著書に、『近藤重蔵と近藤富蔵』、『近世蝦夷地在地社会の研究』など。専攻は日本近世史。

1 明治のはじめの札幌

北海道石狩国札幌郡琴似村。筆者が勤務する北海道大学構内を、旧国郡名で記すとこうなります。本州以南の旧国郡は、奈良時代以来の五畿七道に区分されま



札幌市内河川流域図。JR千歳線は1973年以前の経路が示されている。出典：山田秀三作製「札幌附近略図」（山田秀三『北海道の地名』北海道新聞社、1984年、16頁）。

す。現在の東京都豊島区池袋は、旧東海道武蔵国豊島郡池袋村、にあたるわけです。五畿七道に加え「北海道」が設けられたのは、明治2年（1869）のことで、その際、「道」の下に11か国86郡が置かれ、郡の下に村々が定められていきました。

あれっ、札幌駅北口の北大が、なぜ琴似村なの？と思われた方もおありかもしれません。その謎を解くカギは、北大構内を流れる川、サクシュコトニ川にあります。アイヌ語地名研究の山田秀三氏は、サクシュコトニをサクシコトニ：sa-kush-kotneiもしくはシャクシコトニ：sha-kush-kotneiと読んで、いずれも「浜（＝伏籠川端：谷本註）の方を・通っている・琴似川」と解釈しました（『北海道の地名』）。ここでいう琴似川というのは、図にみえるように、石狩川本流の茨戸（現在の茨戸川）から分岐した伏籠川に篠路附近で注ぐ琴似川筋の河川群をいいます。その最も伏籠川寄り（＝東寄り）の支流が、サクシュコトニ川というわけです。札幌郡に村を置いた当初、琴似川筋一帯を琴似村とみなしたため、北大構内は琴似村にあたるのです。

茨戸附近から分岐する石狩川支流は、ほかにふたつあります。西を流れる発寒川と、東を流れる伏籠川がそれです。伏籠川は、もと豊平川（＝札幌川）の本流でしたが、流路が変わって豊平川に接続しない川となり、フシコ：husko（古い）札幌川という名称になったといえます。それぞれ明治初年に、発寒川筋に札幌郡発寒村、伏籠川筋に同札幌村が置かれました。そして、サクシュコトニ川と伏籠川の最上流域に、札幌本府が設けられることになるのです。

2 札幌中心部のアイヌ社会と琴似氏

さて、札幌郡にこれらの村が置かれた当初、先住のアイヌ民族の集落（コタン）がすでに存在したことは、もっと知られてよいでしょう。札幌の幕末維新期の研究を進められた加藤好男氏の貴重な考証によると、「1」で触れた3つの川筋に、以下の4つのコタンがあったとされています（『19世紀後半のサッポロ・イシカリのアイヌ民族』ほか）。

- ① 伏籠川筋A：東区北9条東9丁目付近
- ② 伏籠川筋B：中央区北2条東1丁目付近
- ③ 琴似川支流セロンベツ川筋：北区北7～8条西9～10丁目付近
- ④ 発寒川筋：西区琴似4条1丁目付近

大都市札幌の、条丁目表記の下から浮かび上がる、具体的なアイヌ社会の姿は、広く共有されるべき歴史といえるでしょう。このうち、明治初頭に③に拠点を置き、琴似川筋一帯を束ねたと考えられるのが、琴似又市氏（以下、敬称略）です。札幌本府にほど近いコタンに暮らし、その地名を名にし負う琴似又市のことを、山田秀三氏は敬意をこめて「札幌市民第一号」と評したわけです（『アイヌ語地名を歩く』）。

3 琴似又市の幕末

ただし琴似又市は、札幌の出身ではありません。松浦武四郎による安政4年（1857）の記録によると、石狩川中流域に位置する「下カハタ」のうち「ウラシナイ」、すなわち現在の樺戸郡浦臼町域に、16歳の「マタエチ」少年の人別があった様子が知られます。のちに触れますが、札幌本府建設で名高い島判官（開拓判官島義勇）との接点がありますから、明治2年（1869）には少なくとも札幌（コトニ）のコタンに拠点を構えていたことは確かです。

さきに触れた武四郎の記録には、又市につき、「浜」という注記と「水野めしたき」という注記が付されています。ここでいう「浜」とは石狩浜を指します。「水野めしたき」とは、箱館奉行所の出張所であるイシカリ御用所駐在の幕府役人・水野一郎右衛門（箱館奉行支配調役）の奉公人であったことを意味します。つまり、16歳の又市（マタエチ）少年は、故郷の浦臼から、石狩の幕府役人の下へ奉公に出ていた、ということになります。

一般的に、この時期に故郷を離れてアイヌ民族が漁業の中心地等の和人に雇用される、というかたちは、和人の都合による「強制連行」の側面をまずは考えなければなりません。一方で、又市が雇用されたのが幕府御用所の武家である、という点は、やや特殊な例と

して考える必要があるでしょう。

水野での奉公を経たのちの明治3年に又市に接した新政府役人の記録に、次のような記述があります（「石狩国上川見分奇談」）。

又市ハ若年の頃数年石狩へ行、荒井金助ニ随従し、言語その他常人ニ異なる事なしと、

さきに見た武四郎の記録と比較して、「随従」（奉公）したのが水野か荒井か、という違いはありますが、石狩詰の幕府役人の下で「若年」を過ごした、という点で一致した記録です。注目すべきは、新政府役人が又市につき「言語その他常人ニ異なる事なし」という風聞を書き留めている点です。ここでいう「常人」とは和人を表しますから、「言語」とは日本語（和語）を、「その他」とは和風の所作振る舞いを、それぞれ指すものとみてよいでしょう。そしてその要因として、幕末の石狩における武家奉公が挙げられているのです。

つまり、又市にとって幕末の石狩での経験は、アイヌ語・アイヌ文化の素養のうえに、和語・和風文化の素養を獲得し、いわばバイリンガルとしての能力を備える結果をもたらした、ということになるでしょう。付言するならば、又市が獲得した「言語その他」は、江戸の武家風のそれであったとみてよいでしょう。

幕末期にあって、幕吏に近侍し和語・和風文化を身に着けた16歳の又市（マタエチ）少年の素養は、以下にみるように、近代に至って十二分に発揮されたとみられます。幕末維新期の状況を的確に判断した又市の積極性を、そこからは見て取れるようにも思われます。

4 島判官と琴似又市

佐賀出身の開拓判官島義勇は、札幌本府建設の着手者として知られ、札幌市役所本庁舎や北海道神宮に銅像があり、また地元佐賀でも幕末明治の「七賢人」の一人に数えられ、近年銅像が建てられました。島が札幌に滞在したのは明治2年11月から翌3年2月でしたが、そこで又市との接点があったようです。

というのも、島が明治3年3月25日の帰京直後の4月7日付で、札幌での部下である開拓大主典十文字龍助に宛てた書簡に、篠路へ幕末に入殖していた早山清

太郎、定山溪開祖の美泉定山、伏籠の「乙名イコリキ」らとともに「土人の又一」へ土産を渡してほしい、との記載があるからです（『島義勇入北記』所載「島義勇蝦夷地関連書簡」20号書簡）。ここに挙げられているのは、島の赴任以前から札幌に拠点を置いていた人々で、又市を含め、島が土産を送ったのは、札幌開府の恩人と感謝していたからにほかなりません。

島と又市との関係は、これにとどまりません。同年8月13日付の十文字宛て書簡には、「蝦夷人又一」が帰郷するので十文字へ伝言を託した（「委細同人（＝又市）より御聞き下さるべし」）、又市へは陣羽織・小銃・太刀・旅費を渡しただけで、十分な取り計らいができなかった、とする記載があります（同23号書簡）。道立文書館所蔵の開拓使文書には、このタイミングでの又市の上京が、開拓使官員の「物持人足」を名目としつつも（「往復其外書留」簿書6438）、「皇城拝見」を目的としたものであったとされています（「開拓使公文録」簿書5703ほか）。

島が又市に託した十文字への伝言の内容が垣間見える、島による漢詩があります（『島義勇入北記』所載「北海紀行詩」）。「蝦夷人又一の石狩府へ帰るを送る、兼ねて十文字大主典・川辺少主典らへ寄す」と題した詩文は、次のようなものです。

送蝦夷人又一歸石狩府、兼寄十文字大主典・川辺少主典等

北海墾開豈等閑（閑）

（北海道の開墾はなおざりにしてはならない）

遠巡終作大邦患

（遠巡していれば、ついには大きな国難となるだろう）

為伝満道諸同志

（北海道中の同志たちに伝えてほしい）

勿使魯夷度樺山

（ロシアに樺太を渡らせてはならないと）

当時すでに開拓判官から大学少監に転じていた島が、北海道の開拓を外交・安全保障の問題として、いまだ関心を深く寄せていたことが伝わってくる漢詩です。榎本洋介氏の研究によると、島の帰京・転任は、開拓方針の対立を受けての島の判官解任という側面を

持つといえますから（『島義勇』）、思うところがあったのでしょう。

島の思いが込められたこの詩は、又一の帰郷に際して詠まれたもので、同時に開拓使の元部下である十文字・川辺へ寄せられたものです。さきの書簡で島は十文字に、「委細同人（＝又市）より御聞き下さるべし」と書いています。このとき既に、又市が日本語に十分通じていると島が認識していたことは明らかでしょう。

これに加え、島は観念のうえで、十文字らとともに又市を、詩文の思いを日本語を介して共有し、その思いを帰郷後に「同志」へ伝えてくれる存在として位置付けていたともとれるのではないのでしょうか。そこには、島が先住のアイヌ民族を「同志」として期待した一面を、読み取ることができるのかもしれない。

5 又市の東京留学とアイヌ社会

明治3年の上京後、又市は翌年には「琴似乙名」となっています。「乙名」とは、近世に行政の任命したアイヌ首長をいい、明治初年まで継続する称号です。又市は浦臼の生まれで石狩を経て琴似川筋に來住していますから、ここで「乙名」とされたのは、日本語を介して構築された開拓使との新たな親和性が評価されたものとみられます。

又市は明治5年から7年にかけて、再び上京します。芝増上寺境内にあった開拓使仮学校の「北海道土人教育所」への「留学」が目的で、又市は「留学土人取締」の役目を担っての勤学でした（写真）。この「留学」をめぐるのは、自らの意思によらない強制的な修学で



琴似又市氏（前列中央：東京・渋谷の開拓使官園にて、明治5～7年頃）。北海道大学附属図書館所蔵

あったとされ、事実そうした側面が確認されます(『東京・イチャルパ』への道)。ただし少なくとも又市は、これを積極的に受容した形跡があります。

それを示すのが、石狩川流域のアイヌ社会への影響力の拡大です。又市は、かつて石狩川流域全体を束ねる「惣乙名」であった旭川のクーチンコロに対し、明治9年ころ、東京留学時に見舞いの産物を送ってこなかったことを理由に「チャランケ」を挑み、論破したといえます(「石狩十勝両河記行」)。開拓使との関係を梃子に、従来アイヌ社会における権威に優越しようとした姿がみえてきます。

乙名への登用と、アイヌ社会内部での権威の確立。明治維新の変革を捉えた地域社会における新しいリーダーの台頭は、全国各地で確認されますが、又市の一連の行動は、まさにその一例としてみる事ができそうです。

6 その後の又市と琴似家

しかしながら、こうした秩序は、長くは続きませんでした。移民の成功につれて、先住のアイヌ民族の存在を前提とした開拓の方針は次第に取られなくなっていくからです。

札幌市域についていえば、明治11年に発せられた開拓使布達甲第43号で、漁業資源保護を名目に石狩川支流の「札幌郡内諸川」での鮭鱒漁を禁じたのは、この流域で暮らすアイヌの人々の生業の基盤を奪ったことにほかなりません。又市が同年に石狩川本流の花畔へ漁業に赴き、また明治15年頃までに篠路村(茨戸)に居を転じているのは、この布達と無関係ではないでしょう。

開拓使文書によると又市は茨戸で、近隣のアイヌ民族を「杣夫」として雇用し、木材加工業へ参入するなど活計の途を探る動きを見せます(「山林採取録」簿書5204)。しかし、結果的に琴似家は、他の多くの札幌市域先住のアイヌ民族諸家と同様、明治30年頃までに旭川近文の「旧土人保護地」への移住を余儀なくされます。

琴似又市に象徴される、札幌における先住のアイヌ

社会のすがたは、こうして後景に退いていくことになりました。道都札幌の歴史が、明治初頭にはその積極的な暮らしが確かにあった先住のアイヌ民族を、いわば意図的に排除したうえで重ねられてきたことは、知る必要があるものと考えます。

7 おわりに

以上、幕末維新期の琴似又市の事績をたどりつつ、明治初頭における札幌の先住民族の歴史の断面を、簡単にではありますが、振り返ってきました。最後に、本文では触れられなかった論点をひとつお示しし、稿を閉じることとします。

明治初頭という時期には、札幌本府建設の労働力や官営牧場の牧士として、札幌近郊のみならず、石狩川流域や遠く余市・美国・沙流・虻田・釧路など、道内各地からアイヌの人々が札幌へ雇い入れられていくような動きもみられます(『新札幌市史』第2巻)。後に続く、道都に結ばれるアイヌの人々による新しい都市型先住民コミュニティ形成の端緒は、こうした動きに求められるのかもしれませんが。

以後、札幌におけるアイヌの人々は、政治・社会・経済・文化的なマイノリティとして、多方面で抑圧と苦しみを強いられながらも、前回の連載で小川正氏が述べられたように、その時々状況に応じての暮らしを営んでこられました。今後は、札幌に紡がれた具体的なアイヌ民族の文化を尊重し、道都の歴史を豊かに彩っていくための未来像を、反省をも踏まえつつ、ともに考える社会の実現が望まれます。

【付記】

本稿は、谷本による以下の文章を基に成稿した。引用文献については、これらを参照されたい。なお今回新たな史料として、「4」に藤井祐介編『島義勇入北記』(佐賀県立佐賀城本丸歴史館、2021年)を用いた。

「琴似又市と幕末・維新期のアイヌ社会」(『平成14年度普及啓発セミナー報告集』(財)アイヌ文化振興・研究推進機構、2003年)、「近代初頭における札幌本府藤下のアイヌ集落をめぐって：「琴似又市所有地」の地理的布置再考」(『北方人文研究』11、2018年)、「札幌市域のアイヌ社会と集落：明治初期を中心に」(関秀志編『札幌の地名がわかる本』垂璃西社、2018年)、「コトニ・コタンと琴似又市氏」(北大ACMプロジェクト編『北海道大学 もうひとつのキャンパスマップ』寿郎社、2019年)